

## 第二十五回

浦賀は、私が戦地へ送られる前に、八か月間勉強した海軍工作学校のあったところだ。横浜海軍航空隊のほとんどが戦死してしまつたといつのに、私だけが何の因果か戦死もせず、餓死もしないで、ここへ再び戻つて来る事が出来た。

忘れもしない一九四五年（昭和二十一年）二月三日、船は浦賀の岸壁へ無事に着いた。おお、懐かしい祖国だ！日本の土だ！われ知らず涙がボロボロ出て泣けてしかたがなかつた。

浦賀を出て、実に三年八か月ぶりの帰郷であつた。

感無量であつた。短い期間ではあつたが、さまざまな悲劇があつた。地獄があつた。あり過ぎた。何回か死生の境をさま迷つた。

軍は陸、海軍とも解散させられたといつ。

それなら、われわれを処分するところがないはずだ。

ホツとした。

私のいた工作学校が新しくできた。復員局の一時収容所になつてゐた。

このまますぐには歸してもらえなかつた。

ニュージランドの収容所での事件については、安達少尉が代表で調べを受けていた。

ここで一人一人事情聴取を受けることになつたとき、偽名のままゐたほうがいいのはと迷つた。捕虜であつたことがバレると、日本でどんな扱いを受けるか不安だつた。親兄弟まで近所から後ろ指さされることにならないか、それを心配した。

軍籍簿にある私の名も、戦友の名にも、戦死と赤字で書かれていた。

復員局から住んでいた地区町村役場へ通知を出し、返事が来てからでないと帰れないことになつていて、五日間いろいろ寝をしながら足留めをくつた。ここではじめて、日本全土が至るところ空襲の被害をつけ、特に広島、長崎が原子爆弾でやられたこと、わたしの故郷、東京も全市内が空襲で焼土と化したことなどを知り驚いた。家族の安否も気がかわれた。

## 軍籍簿の本名

やはり、軍籍簿に戦死となっているのを書き替えないと戸籍を復活することができないらしい。本名を名乗るしかなかった。

私は横志工二〇八七(横須賀鎮守府志願工作科)横浜海軍航空隊三等工作兵、桜井甚作と本名を名乗った。

調べられた後、捕虜だったからといって別に心配していたようなことは何も起こらなかった。仲間同士、実はとここで初めて本名を名乗りあい、お前も、お前もやはりそうだったかと、笑いあった。

帰宅の際、これまでの服装は脱ぎ、夏服を支給されてこれに着替えた。ニュージールランドからずっと履きつづけ、ヒカヒカに磨き上げた靴は、進駐軍に見つかるそうと取り上げられるといわれ、これも支給を受けた地下足袋に履きかえた。

兵隊には全員三百円の金銭と、どこまでも乗って帰れる全国共通の交通無料キップ、五食分のカンパンの支給があった。

北海道や九州へ帰る者がいた。みんなこのまま別ればいつまた会えるか分からないので近くの汁粉屋へ入って送別会をすることにした。入って汁粉の値段に驚いた。以前一杯五銭だったが、二十五円になっていた。

闇屋がしつこくうついてきて、われわれの持って帰ってきた毛布を高く買ってから売れという。北海道へ帰る一人は、物価の値上がりで驚き、たった三百円ばかりを家へ持ち帰ってもどうにもならない、と毛布を売って金に替えた。

横須賀線は空襲で破壊されたまま、まだ、復旧作業ができていないところがあって、途中何度も降りては山越えをして歩かなければならなかった。

つづく

次回第三十六回は八月十日(火)更新予定